

地域支援心理研究センター公開講座（第2回）

「特別支援教育に役立つ子どもへの関わり方(2)」

－支援者と親、それぞれの立場から－

講師：追手門学院大学心理学部教授
橋本 秀美

皆さん、こんにちは。ただいま紹介にあずかりました橋本でございます。

きょうは、3時過ぎまで、皆さんと一緒にこのテーマについて時間を過ごしたいと思います。よろしく願いいたします。

先ほどご紹介がありましたように、本日のテーマは、「特別支援教育に役立つ子どもへの関わり方(2)－支援者と親、それぞれの立場から－」ということでお話しさせていただきます。

昨年度、本講座で「発達障害を抱えた子どもへの理解と対応の仕方、教育者、支援者として子どもや母親とともに」というテーマでお話をさせていただきました。本年の11月に「発達障害の理解と支援－学校・園における発達障害の気づきと対応－」ということで、これはシンポジウムで話題提供をさせていただきました。

今日のテーマにつきましては、シリーズといえますか、その流れとして、特別支援教育での支援者や保護者の立場からのかかわり方についてお話しをさせていただきますと思います。

前回までの講座をお聞きいただいている方も、いただいている方もたくさんいらっしゃると思いますので、最初に前回までのおさらいといえますか、ざっと前回にお話しさせていただきましたところを少し紹介させていただいて、その後、今日のテーマについて皆様と一緒に、私のお伝えしたいこと、日ごろ実践していますことや考えていること、

そして研究の末端などを含めてお話しさせていただけたらと思っています。

お伝えしたいことがたくさんありまして。お手元に資料をお配りしていると思いますが、この項目を見ていただいて、すごく欲張って盛りだくさんに挙げてしまったなってお気づきだと思うんですが、その中で、きょう時間の許す範囲でお伝えできることをお話しできたらなと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

では、早速パワーポイントを使いながらお話をさせていただきますと思います。よろしく願いいたします。

特殊教育、障害児教育と言われるものから、特別支援教育に名称が変わっただけでなくて中身が随分変わってきました。そのことについて少しおさらいしていきながら、私自身が発達障害の子どもさんたちの支援にかかわりながら、携わってどのようなことを日ごろ感じたり、学んだりさせていただいているのかというお話になります。

適正就学という言葉の日ごろ現場の先生方や支援者の方々はよくお聞きになると思うんですが、要するに一人一人の子どもたちが幼稚園、小学校、中学校、義務教育を終えるまでの間、どこで学ぶのか、就学するのが適切かということを検討していく。これは適正就学というのがどこの自治体にもあります。それぞれが委員会形式でシステムをつくって、組織をつくって検討していくわけですが、名称は多少自治体によって違ってきます。

そのあたりのところで少しお話ができたということと、本学では学校現場と大学と、具体的には私の研究室であったり、いろいろな形でかかわっておられる関係機関、そういうところとの個別の支援、特別支援教育の支援員という名称だったり、個別の支援のボランティアであったり、学校の実習の一環であったり、大学院の場合は、臨床心理実習といまして、ここは大学院が臨床心理士のI種指定校ですので、その実習という形で入るという形で、さまざまに連携をしていっています。そのあたりから、少しお話しできたらなということ。

それと、私自身スクールカウンセラーだったり、スクールカウンセラーのスーパーバイザーだったりという形で長年学校現場に携わっています。スクールカウンセラーという立場も、例えばアメリカなどのように、非常に役割分担が進んでいるところでは、スクールカウンセラー、スクールサイコロジスト、あるいはさまざまな特別支援教育についての専門家であったり、さまざまな支援をパートパートに別れて行うということが実際には多いわけですけど、日本の場合は、1人のスクールカウンセラーが、そういう病気を総合的に担当するという形になっていますので、当然発達の問題、発達障害の問題にかかわることになります。

一貫して大切だなと感じている、早期介入、早期対応あるいは早期発見、そして二次、三次障害を防いでいくというところについても、少しお話しできたらなと思っています。

お手元にもありますので、余りここは時間をとりませんが、本日の内容としては、大きく「発達障害の理解と支援」「子どもへの気づきや理解と保護者としての関わり方」、そして発達障害そのものを包括的、全体的に理解していくには、どういうぐあいに考えていったらいいんだろうかということで、「発達障害の全体的理解とその対応」についてお

話しできたらと思っています。ただ、もう1点ちょっと欲張りだったので、全部お話しできたらいいんですけど、そういうぐあいに考えています。

先ほど申し上げました、特殊教育から特別支援教育ということで、どんなところが変わったのか。現場の先生方からの声とか、いろいろな機会を通してお聞きする機会があって、大まかなことをいいましたら、対象の幅が広がったということですね。

知的な発達の障害のない発達障害の児童、生徒への対応。特別支援教育の、一般的に軽度とか高機能と言われている子どもさんへの対応というところが加わってきたということです。

もう一つは、今までは特別支援学校とか特別支援学級とか、非常に限定的な場で行われていた支援が、普通の学級、普通の学校、地域の学校の中、さまざまな場所で行われるようになったというのが、大きな成果ではないかなと思います。

実際に、その中で文科省が検討してきている項目としては、校内委員会を設置することであったり、あるいはコーディネーターという立場の方が必ず学校の中にいらっしゃいます。このコーディネーターになっている人、その役割を担当している人は、最初は養護教諭とか特別支援学級、かつての特殊学級の担任とかが多かったですが、これはもうさまざまに、学校ごとに決めておられます。どなたか、そういうコーディネートをする立場の方がいらっしゃいます。その方のもとに、学校の中で、例えば適正就学の委員会であるとか、いろいろな適性の中でまた検討していく、組織の中で検討していくというようなことになります。

あと、個別の教育支援計画、個別指導計画、こういうものを実際に。実は日本の教育の中でも行われてきているんですけど、非常にまちまちだったんですね。私は現場とかかわ

ることが多いので、ここに養護学校、特別支援学級の先生方もいらっしゃるかも知れないんですけど、実際に年度初めにIEPが策定されて、それについて先生や保護者とが一緒に考えながらやっていったという。アメリカは割と訴訟社会なので、それがきちっと実行されていないと訴訟が起こったり、非常にシビアにこういうことを行っていつている現状があるんですけど、日本の場合は、これはさまざまでした。結構学年末とか学期末に提示されてくるというようなことがあったりして、その辺も力を入れていきましょうねという感じにはなっています。

それから、専門家チームという形で、発達専門の児童精神科医だったり、私のように臨床心理士だったり、さまざまな職域の者が各学校にいろんな形で実際に入って、対象の子どもさんについてのアセスメントから指導計画、あるいは先生方へのコンサルテーション、いろんなことを行うというようなこともあります。

よかった点ってどんなことかなということ、学校現場の先生方の声をお聞きする機会がありましたので、簡単にご紹介させていただこうと思っています。

1つは、特別支援学校があるという、こういう専門性の向上とか、理解が広がる、こういうチーム支援というのが入ってきたということですね。それから、そういう子どもさんの苦手だというものに対応する枠組みができてきたということですね。さっき言いましたように、コーディネーターが配置されたり、発達障害に対応できる教員とか支援員なども、特に支援員などは各自治体によって差はありますが、かなりふ増えてきているということがございます。逆に、学校として対応しなければならぬ課題になっているわけですね。

それから、やっぱり1つ大きな違いは、通常学級の中での特別支援、個別支援等を受けられるようになったということが大きいと思います。ただ、特別支援教育そのものがス

タートする以前も、私たちはやはり通常学級の中にいらっしゃる特別な支援の必要な子どもさんについては、いろんな形でサポートしてきたり、もう私自身も20年来そういうことでかかっていますので、実際には行われてはきたんですけど、これが特別支援教育ということで、学校がシステムとして取り込んでいくということになっています。

当然、知識、経験のある教員や指導に当たれる人を養成していったりということにもつながります。子どもは学習とか生活で、支援を受けることができるようになったわけですね、そういう形で。

もう一点は、現場の先生方とかは当然ご存じのことだと思うんですけど、通級学級の上限時間がかなり増えましたので、今までだと、拠点校みたいところに通級学級があって、大体週に数時間ぐらい、そちらで特殊教育の支援を受けるということで自治体は取り組んでいたり、あるいは自治体によっては通級学級を学校の中に独立してつくったり、そういう自治体もありましたが、いずれにしても、上限時間がふえていますので、そういうシステム、通常学級で学んでいる子どもさんたちが、通級学級で一定の時間、特別支援教育を受けるということが、特別支援教育の通達の中で行われるようになったということがあると思います。

こういう中で、当然取り組んでいる先生方をバックアップする環境が、地域格差という言葉が正しいかどうかわかりませんが、地域によって学校によって非常に差があることは確かです。これがまた一つの課題だと思います。そういう意味で、実際に格差が広がったということをおっしゃる意見もありました。

もう一つは、は現場で私も感じていることなんですけど、障害特性そのものについて医学的な知識は広がっているんですけど、例えば学習障害の中で、学校現場の具体的な対応について、このあたりのところは、まだまだ

課題があると思っています。

これは、例を1つ、2つ挙げていきたいんですけど、やっぱり今、いわゆる通常学級の中に特別支援教育の対象の子どもさんがいらっしゃると、先生は非常に。子どもはみんな平等だから、同じように接しないといけないので、お母さんに、子どもさんのA君には特別扱いできませんよって、30人来たら、30分の1の扱いしかしませんよという形でおっしゃられたとかいう、よくそういうご相談とか、いろんな報告とかあるんですけど、実際に、例えば30人の中に1人、支援の必要な子どもさんに対して、どういう支援を入れていくのかというのが今、各学校でかなり違いがあります。

例えば、今本学が地域の学校と連携している。特別支援教育の支援員という形で、そういう子どもさんにサポートをしているところもありますし、場合によっては、お母さんがずっとそこにいらっしゃる、この特別支援教育が始まってからそういう場面を実際に見るのは減りましたね。やっぱり以前は、本当に通常学級で勉強する、生活するときに、お母さん、それだったらついていてください、みたいな感じで、多動の子どもさんだったり、学習場面で適宜個別のサポートが要るというような場合には、ついておられたりというのが多かったですが、いろんな形でそういう支援員を活用したりとかという部分は進んでいる。ただし、そういう課題が今もまだたくさん残っていると感じています。

支援を受ける子どもさんと同時に、例えばその隣の席になった子どものお母さんから、ちょっと子どもが落ちつかないので席離してくださいとか言われたときに、先生がどう対応したらいいかというので、当事者の子どもさんに聞くと「いや、もう大丈夫です」みたいなことになって、なかなかニーズが生かされていかない。こういうときに、やはり特別支援教育の今後の課題として、支援を受ける

子どもさん、そしてその子どもさんがもし通常の学級にいらっしゃれば、その通常学級のほかの子どもさん、そして特別支援学級の場合もそうですね、それぞれの子どもさんにどういう支援をしていくのか、あるいはそれぞれのニーズにどうこたえていくのかというのは、一つ大きな課題だとは思いますが。

これも前からの問題といたしますか、課題で、障害告知といたしますか、皆さんに子どもさんの特性を知ってもらうことによって、クラスの中でできるだけ皆さんにサポートをしてもらいたいし、また、なぜこういうことが起こるのかということ、支援が必要な子どもさんのお母さんとしては、できるだけ迷惑をかけないためにどうしたらいいのかということをお悩まれますね。

そのときに例えば、「お母さん、皆さんに説明してください」と言われる先生がいらっしゃる、逆に皆さん方に説明したいんだけど、させてもらっていいですかというような形で、そういう場面があったり、そういうときに私たちは、具体的にはもう個々のケースによってそれぞれに助言させていただいたり、先生にもコンタクトをさせていただいたりするんですけど、実際にこれをどうしていくかというのは、4番目に書いています、告知のタイミングの問題ですね。ずっとひた隠しにしているという状態で進んでいった場合に、当事者の子どもさんがタイミングそのものを得ていく、あるいは失っていく、そういうことにつながっていくので、そのこと自体は引き続きの課題だし、私たちはやっぱり個々に対応はしますが、一般的にはこういうぐあいに、ということでやっていることは幾つかあります。今日は全体のおさらいの部分なので次に行きます。

あとの課題としては、今言いましたように、地域、学校、各先生においても個人差があるこの部分についてどうしていくか。当然、研修等の対応は自治体はやっているわけですが

れど、それにプラスしてどういうことをやっていくかということですね。

これもよく質問があったりするんですが、個別の支援を受けているということで、年齢的な問題もありますが、周りから特別扱いされているということで、非常にそのこと自体を拒否したり苦悩したりする子どもさん多いらしいです。なので、どういう形で支援していくのか、あるいは子どもさんが理解していくのか。これは、恐らく受容の問題だったり、先ほどの告知の問題だったり、いろんなことが絡んでくるということですね。

こういう中で、どうしてもいじめとか、仲間外れなどの問題も起こってくる。あつてはならないことですが、現実的には、先生が非常によい学級経営をされていても、やっぱり周囲の子どもさんから心ない言葉を言われてしまうということで悩んでいるというよ相談や電話が後を絶ちませんのでね、このあたりのことも1つ課題になります。

これはSC、スクールカウンセラーとか別の問題も入っているんですけど、連携の一つの課題として、発達障害特別支援教育の専門家チームが学校に入ってその子をサポートする、サポートする対象の子どもさんのことをスクールカウンセラーが実際にまだ把握していないとか、こういうようなことは現場ではよく聞くので、その辺の連携のところも恐らく大切だなと思っています。

あとは、特性に合った教育をするということを皆さんが共有するということですね。現場にかかわる人たちが具体的に共有するということですね。昨日もある現場で依頼があったんですが、特別支援教育の特別支援学級に、通常学級と交流学級とで行き来している子どもさんに、特別支援学級の先生が、行ったり来たりだらだらしてはいけないと注意をしまして、非常にこだわりの強い子どもさんなので、もう僕は全ての先生から迷惑がられていると悩んでしまったりとかいうことが起

こってきます。いかに共有し、共通理解し、そして具体的な部分で、皆さんが同じ方向性を持って対応していけるか。当然、役割分担がありますから、それぞれ役割は違うわけですが、どういう方向性でやっていくかが大事になっていくと思います。

公立だけじゃなくて、今、私立の学校の中にも当然発達の子どものさんはおられて、いろいろなケース、ご相談はたくさんあるわけですが、いじめ・からかいを受けて退学して、もとの中学へ転校しても、対応が適切にいかない、あるいは転校してきたということで、これは不登校の生徒も同じですが、いろいろな子どもがまた二次的な傷つきを受けて、不登校をしたり、ひきこもりになっていたりというケースも実際にはあります。そういうことも見ていかないといけないということですね。

要するに、多様な支援が必要ということになるんですけど。先ほども言いました、いわゆる通級指導教育、それはニーズに応じた場として社会性を培う、あるいは学習の面、いろんなことで。今、実際に現場を見ていて感じるのは、通級学級は十分に活用できる場所もあるかもしれませんが、例えば通級学級担当の先生が、たまたま担当に任じられた、命じられたけれど、実際にアセスメントをどうしたらいいのかわかりません、どういうぐあいに取り扱ったらいいのかわかりませんというところから、なかなかきちっと必要な役割が回ってこないとか、実際にまだまだもったいないなというケースを感じています。

それから、成果がどうやって広がっていくかということですね。人材の育成、当然管理職もそうです、それから、学校を……(?)、これにどうやって適切に入っていくかということですね。

でも、いろいろな人の力を借りてできるところが特別支援教育のよいところ。マンパワーをフルに活用してやっていこうという、こ

れを進めていくことができれば、非常に意味のあるものにはなるだろうなと思っています。

そういう意味で、前後での変化ということでもう1点。これはどういうことかといいますと、導入の前後で、確かに気づきそのものはあるんですけど、医療的モデルというか、医療的なケアを重視するということがあって、そこに将来、子どもは社会、地域で生きていくわけですから、教育とか医療とか福祉とか、その部分とどう連携していくのかというところが今一つの課題だろうなと思っています。医療とつながって連携していくことは非常に大切で、そのときに保護者の方に見える連携であったり、保護者を支援するという視点が入り入れられた連携が必要だなと。学校の中で、医療任せになってしまう。よく起きているのは、医療の現場で何らかの診断がついたとかいう場合に、もうその診断だけが一人歩きしてしまっただけで、それは全部、例えばお薬に頼って治すものなのかということ、それはそうではないですね。そういうところのケア、連携のところがまだ十分にいかないということは、実際には起きていると思います。

それから進学。これはもう一度簡単なおさらいですけど、義務教育に関しては特別支援学校があって、地域の学校の中で特別支援学級があったり、普通学級あったり、その他というのは地域相談が入っているんですけど、支援に入っていこうという形で義務教育の場ではなっていないわけですね。

中学校から高校に行く場合に、とってもいいことやなと思うんですが、現場の先生方や支援に長くかかわっておられる方は歴史的にご存じだと思うんですけど、特殊教育の時代に特別支援学級、いわゆる特殊学級に中学校の3年生までに在籍していないと養護学校には進級、進学できませんというような時代もありましたね、手帳を取ることでできますよという時代があったり、そして今は、特別支援学級からの進路も非常に幅が広がっ

ています。実際に普通高校、それから単位制、通信制、それから特別支援教育等の学校ですね。特別支援学校もノーマライゼーションなんかの非常に多様な視点、取り組みをしようというところも増えてきていますし、私立の一部の高等学校の中には、特別支援学級に相当する指導学級みたいなものもつくっていきましようというところもできてきたり、非常に幅が広がってきていると思います。

これもあくまで、共通理解するためのおさらいの部分なんですけど。私が今からお話しさせていただく中に出てくる言葉の用語の部分で、ちょっとだけ専門的な話になって。DSM-IV-TR、これがもうじきVになりまして、アメリカ精神学会の診断基準ですね、この中で今、PDD、広汎性発達障害って言われているところが、自閉症スペクトラムという表現にまた戻っていくというようなこともありまして。大きく見てこういう高機能というのは、これは言いかえたら軽度と言われていたりして、一般的にボーダーと言われているIQ70という目安ですね、それを下回っていませんという意味で、軽度とか高機能という言葉が使われていて、その中に高機能自閉症、アスペルガー症候群。対人関係、コミュニケーション、言葉の発達、それからこだわりのところでアスペルガーの方は、この3つ組ところの、この言葉のところ余り不得意を抱えておられないことが多いですね。だから、このうち幾つもというか、あるいはPDD-NOS、要するに特定不能の広汎性発達障害、実際に医療現場では特定不能の広汎性発達障害という診断がつけられていることが結構あるんですけど、そのうちの幾つかを持っていますという、グレーゾーンみたいな感じで書かれている場合もあります。

ADHDとLD、このあたりは一応知的なおくれがありませんという70のそこをボーダーで見ていくので、LDの診断がついている場合は、非常に単純、シンプルに言うと、全

IQが70を下回っていませんということになっていて。実際に子どもさんの、あるいは現場で見ている先生方の関係者の方もきっとお感じやと思うんですが、じゃあ69と70ってどう違うねんとか。

本当に、何回かこういう事例もあるんですね。お母さんが、判定機関で子どもの診断を受けるために発達検査をなさって、泣きながら「先生どうしましょう」って。「どうされたんですか？」言うたら、もう間違いなく初期のLDであったりとか、LDであろうということで、診断を受けたらIQが69なので、あなたの子どもさんはLDではありませんと言われましたとかね。だから実際にこのあたりのところは、やっぱり実態をよく見ながら判断、適用していくということを考えていかないといけないと思います。

今、非常に大切なものとして、レジリエンスということが言われているんですけど、要するにこれ、1つは虐待とか、そういうケースで反抗挑戦性、行為障害とかという形に移っていくというような二次障害を抱えていたりとか、身体化していくケースだったりとか、こういうときに、いつもいつも指摘されて、自己評価がどんどん下がってって、結局その悪循環をやっている。つらいことや困難に出会ったときに、それに対処していくレジリエンスが結局は育たなくて、薬が必要になったりということにつながっていきますということが書いてあります。

逆に、そういう悪循環から脱出するためには、だめだ、だめだ、だめな子だ、本人も叱られるし、認めてもらえない、教師もいらいらする、諦める、こういう中の悪循環ではなくて、よいところを見つけて、その子が褒められたりしたら、達成感が得られたりしたら、意欲が上がってきて、先生も自信を持って対応することができて、ここでプラスに変わってくる、簡単にこういう趣旨なと思います。

実際に、じゃあ落ちつきのない子は？とい

うと、たくさんいますね。

ここに1人登場してもらったんですけど、環境が主要因の場合もありますし、子どもの体に要因があるということもありますね。環境の場合も、通常、どの子どもさんでも、時や場所によって落ちつかなくなります。心の内面に不安や葛藤を持っていても落ちつかなくなる。なので、落ちつきのない子がみんな発達に問題を持っているというのは、余りにも浅慮な見方ということになります。子ども自身の要因としては、知的な障害、発達障害を持っている。広汎性、多動性の障害があるということですね。

これは復習を兼ねているんですけど、ADHD、PDD、LDと、こういう子どもさん、一体どうやって手助けしていくのという話になるんですけど、家庭や学校の環境を調整する、落ちつける場所であったり、集中できる環境であったり、やさしい環境ですね。この子たちには、ちょっとした刺激が物すごく過敏であったり、ちょっとした叱責が非常に恐怖であったり、そういう子たちにできるだけやさしい環境の中で、どうやっていくかということですね。

それから、医学的な抗精神薬を使わないといけないという場合も一時的な部分も含めてありますね。

それから、二次的な問題の発見と……(?)等も大切です。それから、精神状況とか。例えば、アスペルガー障害の子どもさんとずっと支援して、つながりながら、その人たちが義務教育を終え、青年期を経て成人して、その後ずっと長くつき合っていくとか支援でつながっていつているので、たくさん大人になっていってくださって、みんなそれぞれの生き方でしているわけなんですけれど、そういう中で、やっぱり非常にこだわりの部分だったり、特別な感情だったり、特別な思考だったり、いろんなものを持っておられるということが多いので、いわゆる一般的なカウ

ンセリング、精神療法、それでやっていくと、とってもそこが評価されて、本人がますますしんどくなるということがあります。これは別の領域の話になりますけれど、ちょっとそういうことも含めて。

ADHD、衝動性、興奮性と言われるこれについては、とにかく好ましい行動を見つけて、そこを評価され。これはもう普通の部分なので、やっていきます。

不注意というの、集中できない、でも、いろんなことにひらめきがある。多動性でも、多動性を生かした領域がある。衝動性は、衝動のコントロールを身につければ、要するに起こる時間の間隔が短いわけですから、この間隔をどういうふうにするかとか、その間隔がどうやって伸びるのかとか、そういうスキルを身につけていけば、非常に実行力につながるのかもできてきます。

前の復習になるんですが、ここをもうちょっと見せてほしかったですというお話があったので、きょうもう一回持ってきているんですけど。

学校に予備を用意するという事です。これは何かというと、物すごく忘れ物の多い子どもさんいますよね。忘れ物をしないように、私たちがいろいろ工夫をしたり、子どものスキルアップをしていくわけですが、そのときに、忘れ物をしたことによって、非常に辛い目に遭う。要するに、勉強道具がないので1時間やることがない、そのつらさとかその経験が、次に忘れ物をしないことに結びつくかという、この子たちは、どうすれば次、忘れ物をしないかということが今、まだスキルが身につけていないわけですので、そういう体験をさせることによって得られるものがないんですね。

むしろ、そういうときに周りから非常に特別な目で見られたり、だめな子やなって見られることによる二次的な問題であったり、先生に叱られたという恐怖による対人関係のい

ろいろな、この子たち特有の課題であったり、いろんなことが起こってくるわけです。なので、忘れ物をしないという前提には、もう1つ用意していくということが1つ入ってくるという意味で、そこに書いています。

それから、注意が散漫な場合に、例えばいますよね、計算して、行を何でか知らないけど、10問やったら2問ぐらいい行がもうずれていたりとか、抜けているのに気がつかないとか。でも、そういうときに定規1本をその一つ一つの計算の式のところに当てながらやっていくということをこの子がやれば、非常に見落としとか飛ばしが改善されるという小さな工夫はいっぱいあるんですね。そういう工夫をすとか。

それから、私はお母さん、特にこれしていただくんですけど、忘れないようにする工夫ってたくさんあるんです。

その中で、先生と協力して連携しないといけないことが幾つかあって。例えば、小学生だったら、連絡帳を書きますよね。そのタイプの子どものさんの場合は、一番前の席で、できたらど真ん中じゃなくて端っこのほうが、子どもの圧迫感が少ないとか支援者が横につきやすいとかいう利点があるので、一番前の端席とかをとっていただいたりするんです。先生は全体に1回注意喚起というか、インフォメーションをする。そのときに目の前に座っていれば、もう一回その子の確認を上げることができる。その座席一つも確認がありますし。小学生だったら連絡帳を書きますね。連絡帳は必ず、前の席でなくてもいいのはあると思うんですが、先生が後で持っておいでって言って、またその子に持ってこさせて確認する、もちろんそれでも確認はできるんですけど、先生も忙しいので、できるだけそのときに前席で、この子の連絡帳をちょっとのぞいてあげたら書いているかどうか、何が書いているかということがわかるわけですね。連絡帳を子どもが書いて帰らない

ことには、お母さんが把握できないわけですね。その連絡帳を書いたところまでは、先生がサポートしてあげて、確認してあげて、子どもは、お母さんは今日用意、連絡帳をここに出しなさい出しなさいということになると、非常に圧迫する場合だったら、もうここに出しましょうという場所を決めておいて、そこに置くようにするとか。なかなか出さない子だったらそういうぐあいにして、今度それを確認して用意を一緒にする。それについては、忘れ物のない経験をちゃんとさせてあげる。学校に予備があるということと意味が違いますのでね、家から忘れ物がないように、お母さんがちゃんと一緒に用意をして、確認をしてあげる。そうすると、子どもはちゃんと忘れ物をしないで持っていくと、どんなに気持ちがいい、忘れ物をすると嫌な思いをするけど、しないと気持ちがいいとか、あるいはそれによって周りからマイナスの評価を受けることが少なくなったりとか、いろんな形でよい経験を重ねていって習得していくものというのはたくさんあるので、そういう工夫をするということも必要になります。

それから、これはきっとどこでも、いろいろ工夫されていると思うんですけど、特に視覚のところの情報が整理ができにくい子ですね。いっぱい入ってくると全部目に、視覚に入ってしまう子。こういう場合は、つい立てだったりカーテンだったりという形で、そういうものをつくってあげる、そういう場の工夫をするということですね。

ルールを確認する。このルールの確認は非常に大切で、最近だとやっぱりゲームだとかで、何時間もやるとかいろんなことが起こってきますよね。お母さんが毎日毎日、もうやめなさいやめなさいとか怒る、子どもはまだやめない、いつもけんかになったり、叱責が続く。ルールを決めましょうというときに大事なことは「一緒に決める」ということですよね。お母さんから、あるいは先生から、あ

んた、こうしなさいって言われたルールの中には、本人にはできないと初めから疑問に思うものだったり、困難に思うものもあるわけです。だから、一緒にルールを決めて確認する。そのときに一番大切なのは、できるルールを決めるということです。だから、ちょっと緩めでも易しめでもいいので、できるというルールを決めることによって、子どもはできたという経験をするができるわけです。できたという経験によって達成感も得られるし、褒めてもらえるし、お母さんも叱らなくていい、先生も叱らなくていい、褒めることができる。先ほどの悪循環とよい循環の関係ですね。ルールを決めるときはできるルールを決めていくということが、すごく大事になると思います。そうやって確認し合っ

てルールを決めていくということですね。それにも少し関連はしますが、目標というものもそうですね。目標は、要するに一段一段、一段階ずつ、これもできる目標を立てることですね。長期的な目標というのは、当然それがある中期、短期があるわけですが、長期的な目標が一番苦手ですね、このタイプの子どもさんは。なので、まずそれを踏まえた上で段階的にやっていく。

跳び箱が1段飛べて、あっ、喜んでる。じゃあ、次3段やろう、5段やろうというときに、もうできない。チャレンジできない、意欲も湧かない。失敗をして、もう僕はだめ人間だ、また、あんただめねってなる。そうじゃなくて、1段飛べたら、もう1回は1段を飛ぶ。3回ぐらい1段を飛んでもいいですね。すっかり1段の自信ができたなら、2段に行く。2段もすっかり自信ができたなら3段に行く。これは、行動療法とか、そういういろいろな心理的な治療の技法の中にも取り入れられている方法の一部ですけど、そういうぐあいに決めていくというのがすごく大事になると思います。

子どもは大声を出してはだめですとか言わ

れても、自分の声がどれぐらいかとか、周りがどういうぐあいに受けとめているかということがわからないので、一応ボリュームを数値化してあげるとか。今どれぐらいって。だから、心の中で話すときはゼロですね。そばの人にそっと話すときは1ぐらいですね。グループの中ぐらいに聞こえるのは2。クラス全体に聞こえるのが3。これもあんまり段階をたくさんつくとわからなくなっちゃうので、もう本当に大まかな段階をつかって、例えば隣、グループ内の話し合いのときに3ボリュームでやっているときは「今のボリュームどれぐらいかな？」と言ってあげて「今、2でもいいかな」とかいう感じでしていくと。

特に、多動でとにかくもう動きがとまらない状態のときに、何か書いてくださいって、難解な問題を解きなさいとかじゃなくて、ちょっとお手伝いみたいな感じで「ちょっとこれしてくれる？」とか、そういう形で、少しガス抜きというか、そういうのをしていくとかいう工夫をしてあげるとい場合もあると思います。こういう形でやっていくということですね。

アドバイスのポイントって書いているのは、そういうときに具体的なことってないのです、要するに大事に育てていく。日常生活が円滑にいくということで、みんなで工夫をする、いろんな余裕を持って行くとかで、一番大切なのは、常に具体的な説明をする。

これは、カウンセリングでもそうなんですけど、若いスクールカウンセラーの方とかに私、接するとかするときもいつも言うんですけど、お母さん頑張ってくださいとか、励まして差し上げたりとかされたり、大事ですけど、一番求めているのは、具体的にどうしたらいいかということですね。それに困っている場合が一番多いわけですから、具体的な説明をちゃんとして、具体的な態度をしていくということが大事ですね。

何か日本人って、褒めたら凶に乗って怠け者になるんじゃないかと思ってしまう向きもあたりするみたいですけど、やっぱりこういう子どもさんは、もうとにかく褒めてあげることによって初めて、自分の存在が肯定できるというかな。ちょっと余談になりますが、実際に、お母さん毎日1日1回寝る前までに1回褒めて寝るようにしてみましようかねとか言いながら一緒にやっていると、大抵「いや、1日1回、褒めることなんか見つかりませんよ」という感じで、初めすごい苦労するんですけど、実は当たり前ということで褒めてなかったんですね。例えば、お茶碗運んでくれる。これはちゃんと、お手伝いをしてくれてありがとうって、一つ一つそういうことを振り返ったり、確認して、そして子どもに伝えるということが大事ですね。何々ができてえらかったね、きょうはこれがえらかったね。その場で言ってあげないとわからないということがありますからね。例えば、朝やったすごいいいことを、夜寝る前に、きょうは朝、こうこうしてえらかったねって言われても、それは必ずしも入るとは限りませんので、大事なのは「その場で」という部分で。ときには葉が必要なこともあります、このあたりまで……(?)ですね。

対応の問題。もともと問題が、環境を提供してくれて出てくるので、継続したかわりが必要ということになります。

広汎性発達障害、これもポイントとしてお話ししていきたいと思います。

見てわかるようにするということですね。特に視覚優位、目で見ることが非常に入りやすい、理解しやすい子どもさんの場合は、ボードだったりとかいろんなものを工夫。これは実際に、今年も学校現場でやって、非常にそれはその子どもさんにとっては意味があったというか。効果があったんですけど、ずうっと通常学級の小学校の小さい子どもさんで、1時間に十何回とかトイレに行くん

ですね。そのたびに先生に対して注目行動で、「先生、トイレ行きます、トイレ行きます」って言ってから行くんです。で、支援員にボランティアで、この学校の学生がいる現場だったんで、トイレカード、「トイレ行きます」ってカードを黙って先生に見せれば、もうそれで先生が目で合図したらトイレに行くという、そういうトイレカード。そうすると、この子はそれでトイレに行くわけですね。でも、子どもさんが「トイレに行きます、トイレに行きます」と言っているのにはいろんな意味があるんです。多動であったりとか、衝動的なものが抑えられないとか、いろんなことあるんですけど、やっぱり先生に注目行動、確認行動をしたかったわけです。でも、カードを出すことによる先生との確認行動によって、大体数回以内とかになっていたり。やることは、その場その場で、たくさんあると思います。

スケジュールを前もって伝えるのはすごい大事ですけど、これも伝えるときに1つだけ気をつけておかないといけないのは、明日はこうこうです今日はこうこうですとスケジュールを伝えます、こういうタイプの子どもさんはスケジュールの変更が非常に苦手なので、伝えてもらうということはすごい大事なんですね。わからないまま臨むよりはすごく大事なんです。ところが、ときにはそのとおりにはいかないということがあるんですよ。もう全てちゃんと予定していたのにいかないと。急にその場で起こったときにやっぱり瞬時にやらないといけないことは、これはルールが少し変わりました、スケジュールが変わりましたということをソフトに、できるだけ知らせられる方法があれば知らせてあげることが必要です。だけれど、それと同時に、今は変わらないはずだけど、もし変わったときには、その変わったルールになることもあるということを了解してもらおう。それは非常に難しいんです。非常に難しいんですけど、その

方法は、今言いましたように、最初に決める。スケジュール、内容によって違いますが、スケジュールの変更が伝えられるようなものなのか、瞬時にそういうことが起きたときには、別の方法をとらないといけないのか。だけど、ちょっとそういうところを必要とすることも、絶対的なものじゃないということを一通り、非常に矛盾しているんですけどやっておかないと、絶対的なものを与えられたと思っている子どもさんにとっては、もう大パニックが起こるといことはよくあります。せっかくスケジュールをちゃんと調べたのに、大パニックが起こっちゃうということがあるので、そういうような工夫も必要かなと。

授業のルールの工夫、これは当然大事です。例えば算数の問題を解くとか、これも一つのルール、解き方のルールですよ。だから、ルールを学んでいくということは、生活、ソーシャルスキルそのものでもありますけれど、学習面にもとても必要なことなので、そのルールをどうやって工夫したり学ぶかということですね。

これは本当に長年、日々感じるんですけど、やっぱり好きなこととか得意なこと、これが初めからすごく見つかる子どもさんもいらっしゃるし、なかなか見つからないという子どもさんもいらっしゃるかもわからないんですけど、やっぱりそれを生かしていくということで、その人生は本当に変わることではたくさん、今までの中でも。セラピーの工房(?)で、色塗りを交互にしたりするのがあって、ある子どもさんは、もうすごく色彩感覚がいいんですね。それで、少しセラピーでアートを取り入れていきました。今、自分でも個展を開くぐらいの、一人立ちできるぐらいの画家という形で自立していった方もいらっしゃるし、いろんな意味で、特に、今はコンピューター系が強い子どもさんとかすごくいらっしゃるの、「生かすも殺すも」というとすごい言葉が乱暴ですけど、

やっぱりどうやってそれを生かしていくのか、そのためには非常にのめり込む、こだわる、固執性、いろんなものを持っておられるので、その中で、それとどうつき合っていくのかという工夫、そういうものが必要になるということなのです。

二次障害というのはこういう形で出ますという話で。失敗ばかりして、苦手なことで失敗してつらい気持ち。もうだめだ、そこで反社会的な行動につながっていったり、非社会的な二次障害につながっていったりというようなことになっていくということですね。工夫の一つとして、例えばお掃除。拭き掃除を掃除の時間にするとしても、大抵この子どもたちは手抜きをしないとか規則を守るとか、そういうようなタイプの子もいますよね。そのときに、自主性に任せるとか、大まかな指示、「ここ、やっとして」みたいな、それではできない。嫌がっているのに、わがままだということで無理やりやらせる。その場合に、やるというこの子が行動をとれるような状況をつくってやらせるのはいいんですけど、無理やりやらせるとしたときには、いろんな弊害があるということです。できるだけ、やり方としては、守るべきこと、そしてあなたの役割、できたらちゃんと評価してあげることが必要になってきますね。そうすると、そうやって当番ができた、係ができた、自尊心が育っていく。お薬も要らないように。

これも学校現場で支援、学生が実際に入っていたときにやっていたくんですが、掃除の時間、何していいかわからなくて、うろちょろしているという子どもさんもいますよね。順番に1つずつ。まず、箒を出します。きょうの範囲は、ここからここまでですと、ちゃんと廊下に範囲を示します。ここから始めて、こっちで終わりますと。どっちから始めて、どっちで終わりますと。範囲が終わったら、次にちりとりを持ってきます。ちりとりと、次に箒を掃除箱から出します。ゴミを

ちりとりに入れます。で、ちりとりにごみが集まったら、次に箒を置きます。で、ちりとりを持って、ごみ箱に入れますという、一つ一つ行動を具体的にやっていくというのが大事だと思います。

時間的に厳しいのでざっといきます。

私たちが困ることということで、今話をしたようないろんなタイプの子どものさんの中で、急な予定変更とかそういうことはとても苦手なので、前もって教えてくださいねということですね。

言葉で自分の不安とか気持ちを伝えたりすることとかがとても苦手なので、具体的に知らせてくださいということですね。文字を読んで理解することが得意な子どもさんについては、黒板やノートに書いてくださいと、言葉だけじゃなくてね。聴覚からすごく入りにくい、非常に混乱した子どもさんなんかはそうですね。

それから、自由に過ごす。これは不登校なんかの子どもさんが、学校に最初に行き始めるときも休み出すときもそうなんですけど、休み時間ってすごい恐怖なんですよね。みんなが自由にしているときというのは。これは対人関係でもって恐怖しているのが不登校の子どもさんに多いんですが、こういう発達系の子どもさんの場合は、やっぱり自由とかということで自分が何をしたいのかわからないということがあるので、徐々にしてくださいということです。

それから、決してどならないでください。とにかく怖さ、恐怖だけが残りますということ。

これを簡単にまとめると、何が苦手か得意か。今はもう本当に社会的に超有名なこういうタイプの方の成功例ってたくさんありますよね。そういう方たちも恐らく得意なところを生かしながら、苦手なところをどう補っていくのかとか、もちろんそういう大きな会社の社長さんとかになっている人は、恐らくそ

ういうのはブレンがやって、得意なところは自分で生かすという形になるんでしょけど、そんな例ばかりではないので、そういうところを見ていくということですね。

学習面、行動面、そのあたりのところで見ていきましょうということです。実際に、重なり合っていることが多いです。なので、本当にこの子、一体何だろうと。この子は、ADHDです、LDです、PDDですと、そういう見方で見るのではなく、この子が持っている特性は一体何だろうというぐあいに見ていくと、それについての対処の方法もわかっていくということですね。

これも前回の復習になるので急ぎますが、パニックについては非常にいろんな方法があるんですけど、落ちつける場所をつくってあげるといのは大事です。そのときに例えば学校場面だったら、教室の中だったらどこ、例えば何か掃除箱が好きなき多いですね。だから、後ろの掃除箱の中とか、そういうものを見つけていたり。これ結構やると割とうまくいった例があるんですけど、いわゆるお守りというか、何か具体的にお守りを持って、これを少しさわると気が落ちつくんですとか、そういう場合もありますし、何かそういうようなものを、結構小さいときから、愛着タイプでいろんなものを持っている方がいらっしゃるんで、何かそういうのとうまく組み合わせてつなげて、そういうことをやるとか、いろんな場合がありますが。実際に相談して、できるだけパニックが起こるまでの、まずは起こる回数が減ったり、起こったとしても落ちつくまでの時間が少しずつ短くなってきたり、それをちゃんと支えてあげないといけないんですよ。前は1時間かかったけど、きょうは30分で落ちついてえらかったねとか、そうやって改善されたことをちゃんと言ってあげないといけないですね。

これは、今までにお話しした内容と関連しているんで、時間の関係で飛ばしていきます。

PDDの方は特にそうですね。社会的、コミュニケーション、想像力、こういう問題のところに適切な対応が入るのか、不適切な対応が入るのかということによって変わっていきます。不適切な対応によって、ストレスが非常に加わってパニックを起こす。適切な対応によって評価されたり、見通しがたったり、社会性が伸びて独創性が育つという、こういう2つの悪循環と良い循環との関係がありますということですね。

これは、ADHDの背景に虐待、特にPDDの場合はネグレクトを抱えていることがあるというので。時間的に、すいません、飛ばします。

本人へのカウンセリングのポイントとして、例えば相談ですね。カウンセリングと書いていますけど、相談に来てくれたり、お母さんに何か言ってくれたり、そういうときには、そのことをねぎらう。よく話をしてくれたね、とか。ぱっと聞くと、何と身勝手なと思うようなことを言い続けていることがあるんですけど、とことん聞いてあげることですね。それはなぜかという、その子の中ではどうしても筋が通らない、理解できないことが起こっているわけですから、それを聞いてあげるといことです。困っていることは何かを理解して、受容するということです。日常生活では、場面の相談に乗るといことがあります。どうしたらいいのかなという具体的なことですね。具体的なことをやっていくということですね。

パニックの起こりやすい人には、そういう工夫をしたり、一緒に考える。やっぱり努力したことをとにかくねぎらって、褒めてあげると。

実は小さいときから、みんな物すごく孤立感(?)とか、孤独感を持っているんですね。それを感じてしまうことが多くて、ずうっと大人になるまで、その子とつき合いながら話を聞いていると、本当に誰にもわかってもら

えないという部分もあるんです。家族であったり身近な人であったり、誰かが本当に愛情を込めて一緒に考えてあげるとか聞いてあげるといことが、そういうことが得られた人と得られなかった人が、いかにその後のいろいろな生き方が違ってくるかというのは実感しています。

お母さん、保護者の方がいてくださるかかわからないので、もう当たり前のことだけ書いています。まず困っているところをちゃんと受容しながら、今までのことは、これは形式的にねぎらうとかじゃなくて、本当にみんな、何ていうんでしょうね、つらい思いだったりとかだったりいろんなことをしてこられるわけですから、一緒にそれを考える、一緒にそれに思いをはせる、それ自体がねぎらうということだと思えます。

で、日常場面の具体的なことですね。

お母さんだけが孤立してしまわないように。私は、よほどでなかったらご両親にお会いします。できるだけ、それぞれの状況に合った役割分担をしていくことが大事なので、そういうようにします。時間が必要な場合も、それについて一緒に考えるということです。こういう連携が大事です。

恐らく、私に与えられた時間が少しですので、15分くらいなので、ちょっと飛ばしつつ行くことになってしまいます。

これは、話し方がおかしいとか、話さないとか、こういうことが小さいときに。なぜかという、前方支援、できるだけ早い時期から気づいて対応していくということは、言葉にすれば早期対応とか早期介入とか言われますけど、非常に有効というか、違うんですね。ただ、すごく遅い時期から対応したからといって、間に合わないということじゃないんです。ただ、やっぱり早くからすれば、それだけ実りのあることもあるということで、こんなことはありませんかというので、いろんなところから出ているお話ですね。

ちょっと時間が来てしまったので、そのあたりは、私、後日配布できるようにしますので、配布希望の方は、最後に受付で終わったら、住所を書いていただけますでしょうか。

いろいろ教室の中で、きっといろいろな困難ってあるやろうなあということで、こういうぐあいに、苦手な教科であったり計算の問題であったり、課題をやるという順番が待てないとか、人の思いが理解できないとか、集団行動がとれないとかというようなことがあります。特にLD、ADHD、高機能自閉症、こういう気づきや指導は、学校が中心的な役割を果たしますので、学校の先生と家庭と専門機関等の連携によって、できることがたくさんあるということなんです。なので、そのチャンスを逃さないということは、すごい大切だと思います。そうやって見逃さずにやっていくということです。これを見逃してしまって、学習上の困難とか構造上の問題を非常に発展させていくと、いわゆる二次的、三次的な障害とか問題とか言われるいろんなことにつながっていく。一定の年齢以上で困難を抱えている方は、ほとんどというぐらい、もともとの特性そのものよりも、二次的、三次的に起こってきたことというのが本当に多いなと思っています。私たち、親や大人の思いとしては、この子たちには学習面も行動面も不利な状況にあって、そういう上で、そういう困難を抱えていき、どうやって支援していくかということが大切であるということです。一人一人の子どもさんの成長発達に取り組むということです。

不登校と発達の問題というのがありまして、例えば発達の問題、課題があって、何らかの困難を抱えてしまって学校に行きづらくなる。学校に行かないということによって、ようやくいろんな自分の抱えている苦悩や困難から一時的に解放される状態になる。そして復帰、学校とのつながりが、これが学校がつながっていればそうならないんですけど、やっぱり

つながりが薄くなったり切れていくと、ひきこもりや長期化していくというような例がたくさんあります。不登校の問題、かなり多様ですから。背景、要因が、例えば発達の問題を抱えていたとしても、さらにいろんな問題が絡んできて起こってきているわけですから、それを解決していくのはケースごとに違うので、今ざっとここに挙げていますが、また機会がありましたら、この不登校の問題については背景要因をきちっと見ながらお話しできたらと思います。

違う視点で発達障害というのを見ていくという意味で、きょうは描画法と言いまして、これは投影法という心理テストの一つではあるんですが、また心理療法といって治療にも使うんですけど。

私は長年、この発達障害、あるいは描画法等にかかわっているんで、たくさんのお母さんがたくさんのお父さんの絵を描いてくださっているんですけど。今日はこういう場で、当然誰も特定できない状態で一般にお見せしますが、皆さんのお役に立つんだったら、こういう場で見てもらっていいですよと言ってもらった絵だけ持ってきたので、それで話をしたいと思います。多分事例を話す時間はないと思うんですけど。

これは、高機能自閉症で、多分ADHDがちょっと入っている方で、4年生の男の子のですね。この絵って、バウムテストって言いまして、1本の実のなる木を描いてくださいというテストなんです。これ一筆書きで、ずうっとこういうぐあいに木を描いていまして、これが1年後ぐらいの絵なんですけど、木そのものは非常に太くなって、安定した感じもありますけれど、人の目で見て、4年生の男の子が書いた木の絵という感じで見るとどうですかね。知的には特におくれはないんですけど、一筆書きで、とってもファンタジーな絵ですよ。このタイプのお母さんって、この子も、これ「お化けリンゴの木」って書

いているんですけど、一般的な木って描かないことが多いですね。何か特定の木を描くというのが多いんです。物事がすごく一般化しにくいという特性が関係しているかなと思うんですけど。これ、どこかにお化けが隠れているって、非常にトリック的なことも好きですね。この絵を描いたどの子もが発達の課題を持っている、そういうことじゃないんですけど、こういう絵を見てもらうと、感じてくるところがあるので、そういう意味でちょっと今日は幾つかだけですけど持ってきたんです。説明すると時間足りないんで、ざっといきますけど。

これ家族画ですけど、冷蔵庫を描いて、お母さんが料理しているところを描いているんですが、お父さんとちょっといろんな問題がありまして、お父さんを描いてないんですが、実はここの、ちょっと見えにくいと思うんですけど、お母さんのフライパンは目玉焼きが3つちゃんとありましてね、お父さんの分もあるんです。この微妙な葛藤ですね。登場はしてないけど、ここにちょっとお父さんの目玉焼きがあるんですけど。

これも非常に、脅威に感じているお父さんが自分の上に乗っているんですけど、これも非常に吹き出しの漫画チックな絵なんですけど、まあこういう感じの絵をこの子は描いている。

これを、この子の気持ちを理解する意味で見ってもらったらと思っているんですけど、これ動的な学校画と言いまして、学校で先生とお友達は何人でもいいので、先生と友達と自分を書いてくださいという絵なんです。一番前が先生ですね。この辺は友達です。これが本人です。先生も友達も、ぐるぐるぐるぐる手を回しているわけです。本人はこれ、手をこういう形でもって。これは、この子にとって、先生も友達も学校の中の周囲の人間というか、とっても脅威なんですね。手がぐるぐる回っている、こういう感じなんですね、この子か

ら見ると。そういう一つの見方ができるということですよ。

これも次に学校の絵を描いたものです。これなんか、トイレでウンチが描いてあったりで、非常に異質な汚いものを描くとか、割とそういう感じで描くことも多いんですけど。この子の気持ちの、特性の一端みたいな感じでね。

これは、高機能自閉症で、この子もちょっとADHDが入っているんです。もともとは普通に学校生活を送っていたんですけど、小学校の5年生のときに、聴覚、耳から入る情報に非常に敏感なんですね。それで音楽の時間がすごい苦手なわけですよ、いろんな音が出て。そのときにパニックを起こしちゃって、ばあんって譜面台をぶつけたら、女の子にかなりのけがをさせて、10針近く縫うようなことになって、そのときにとっても叱られて、毎日反省文を書かされて、そういう叱責を受けて。叱られるわけですけど、1カ月後にはこの子、言葉が出なくなっちゃったんです。いわゆる場面緘黙。家では、最低限のことはお母さんに話をして、声は出るんですけど、学校では一切声が出なくなっちゃったんです。6年生から個別支援を入れました。中学校の3年生のときに私が一番うれしかったのは、「何が必要?」と言われたら「愛情」って言うと、皆さん当たり前前みたいに思われるかわからないんですけど、やっぱり愛着形成、本当に信頼できる人間との愛着形成ができてくる、そうすると、言葉の出ない、この子の場合は緘黙ですけど、自閉症で言葉が非常に出てない子どもさんが少しずつ、その愛着形成ができた対象の人には言葉を発していく。支援に入っているボランティアさんの名前を呼ぶとか、そういうことがよく起こってくるんですけど、この子も、ずっと支援を入れて、中3の卒業式のときには、舞台上立って。この学校はみんなで歌を歌うんですけど、本当にその舞台に立っていいかどうかって、最後まで状況を見てやったんですよ。その子

は歌を歌いましたね、口パクだけじゃなくて、ちゃんと声が出ていましたね。でも、この子、すぐに場面緘黙が回復したわけではありせんから、長くかかった。そういう意味で、こういう特性を把握して、どういう対応をしていくというのは、非常に大切ということがあります。

この子も、木を描いてくださいのところで、このときは「木の実」ってわざわざ描いてくれたんですね。その次には、ドングリの木って、何かとにかく特定化します。一般的な、というのは少ないんですね。これも、しばらくして描いた木ですけど。

これが、さっき申し上げた家族画です。あなたとあなたの家族の人たちが何かをすることを描いてください。これも完全なる問取図ですね。この子の家族のイメージの中には、人じゃなくて物質だけなんですね、この家の構造だけがあって。で、動的な学校画、さっき言いました学校のほうの絵です。これも学校のパンフレットかというぐらい教室の配置図がありましてね。でも、この子にとっては学校という場所はこういう構造化された、無機質なこういうものなんですね。

一般的に言いますと、100人絵を描いて、この学校画や家族画を描いてもらおうと、100人中100人、場合によっては99人が人を書きますね。だから、人を描かないのは、100人に1人いるかどうかというぐらいのことを考えてもらっていいんですけど、そんな感じですよ。支援が入って、中2ぐらいで、本当にその支援員との温かい関係ができてきて、いろんな中で、少し客観的に自分の家というのが、太陽が出てきたのが黒いですけどね、ちょっと嬉しいかなと思いました。学校画のほうも、ほとんど変わらないんですけど、少し学校、「場面」という感じで出てきたんですよ。

これ中3のときの家族画で、この人は高機能の方でして、絵を描く、発達的なレベルと

して、普通に人間が描けるレベルです。でも、なぜか動物のような。これは、どういうように見るかという、心理的な退行、ちょっと赤ちゃん返りしているという感じです。これも、中2のときの人物画なんですけど、退行しているときは、こんな絵を描いているということなんです。

これは、ADHDの反抗挑戦性の方で、小学校のときに5、6年でいっぱい友達にけがさせたり先生を箒で殴ってしまって、先生もすごい大けがしたりいろんなことがあったんですけど、お母さんは学校から、見相にちょっと相談しなさいということで行かれたんですけど、子育ての話ばかりでやめてしまわれていて、中学校に入って問題行動が続出して、学校の中に警察も何度か入ってもらわないといけないというようなことになってから依頼があって、学校の先生のコンサルテーションと、お母さんのご支援と、本人の支援と。この子も中学校2年からという遅い時期だったら、すごい苦労したんです。やっぱり支援員と先生もキーパーソンで、よいモデルになってくれる先生がいらっしゃって、学年主任の先生が、私もこんなにメールとかやり取りをして、おうちも何度も来られて熱心にしてくださいますして、よいモデルになってくださったんですね。だから、この子が周りから単に外れ者という感じじゃなくてどのように対したらいいかという、この子は自分の得意だった分野を生かして、今はよい社会生活ができるようになった。まあいろんな経緯がありました。それがこれ、木の絵なんですけど。この子が木を描いて、7%、50%、43%。7が自分で、50が恨みで、43が復讐って言ったんです。でも、復讐が50でなくてよかったなと思ったんですけど。自分の親ですね。これも、ちょっと時間がない。

これも、アスペルガーの女の子さんが描いてくださって、このこだわりの部分ですね。

これもアスペルガーの高校生の男さんで、

これはエヴァンゲリオンの木とって、もう50分ずうっとエヴァンゲリオンの説明しながら描いてくれて。私、一生懸命勉強するんですけど、エヴァンゲリオンが難し過ぎてまだわからないことも多いんですけど。

これ、1つだけ言って終わります。これは最初に木を描いたときに、猫もいるよ、鳥もいるよ、隠れているよって、木の中に実だと葉っぱだと言いながら、動物を描いてちょっとトリックなんです。これは、発達障害かな、あるいは統合失調症かなというときに、2年後に、やはり木の絵ですということでも描いてくれて、全部動物なんです、鳥やら。ここで少しやっぱり医療的行為、ずっと医療的な部分をお話ししてたんですけど、かなり拒否的だったんですけど、措置につながったということです。

もう時間がないので。本当にもう、私、諦めが悪くて、すいません。(笑)

もし、あれやったら、一応こういう本にもいろいろ書いていますので。それは、もう本当にそういうことで、おわびをして終わります。(拍手)

(了)

(注)

上記は、2013年2月23日(土)に、追手門学院大学において開催された、地域支援心理研究センター公開講座「子どもたちの健やかな育ちのために(2)」の講演をもとに作成した。